

稲門地学会會報

巻頭言：会長就任にあたって

稲門地学会会長 坂 幸恭

昨年ほどではなかったものの猛暑も過ぎ、秋を迎えてやれやれといったところです。会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、堤 貞夫先生がこの春定年退職されました。稲門地学会会長は教室の最年長者が務めることが不文律となっています。そのため堤先生の跡を継いで、私が第 6 代会長をお引き受けいたしました。私自身の定年まで長い期間ではありませんが、それまでの間微力をつくす所存でいます。

今年の会報でも申し上げたとおり、もう 40 年近く前、生意気そのものの助手であった私が、何の用だったか大杉研究室にお邪魔した時のことです。先生と亡くなられた一期生田中耕平氏が同窓会立ち上げの相談をしていました。先生は私の顔を見るなりおっしゃるには「どうだ坂君、君も参画しないか」。私は言下に言い放ちました「嫌です。雑用が増えます」。よくもあのような不遜な態度がとれたものです。私が大杉先生の立場であれば、「何様だと思っているんだ。お前なんかクビだっ！」と激昂したことでしょう。今まで誰にもうち明けていない過ぎし日の恥ずべき行為です。

その私が馬齢を重ねた末の会長です。昔日の不見識を贖罪する意味でも責任を果たさなければなりません。そこで、まずは、皆様方のご協力をお願い申しあげる次第です。

稲門地学会が発足して 38 年、会員の数は 1700 人を超えました。私が助手として赴任した当時、‘早大教育地学’と所属を告げると、一様に「え 早稲田に地学があるの?」という言葉が返ってきました。それが今や、地質学界で、教育界で、業界・企業で、教室の卒業生がリーダーシップを発揮している状況です。国内はもちろん海外でも‘早稲田の地学’は名を馳せています。まことに残念ながら何人かの会員が物故されましたが、もうそろそろ第一線を離れようかという重鎮から、働き盛りの要職、中堅そして若さ漲る新人まで、さまざまな分野で活躍して‘早大地球科学’の名を更に高めています。心強い限りであり、本会としてまことに欣快に耐えません。

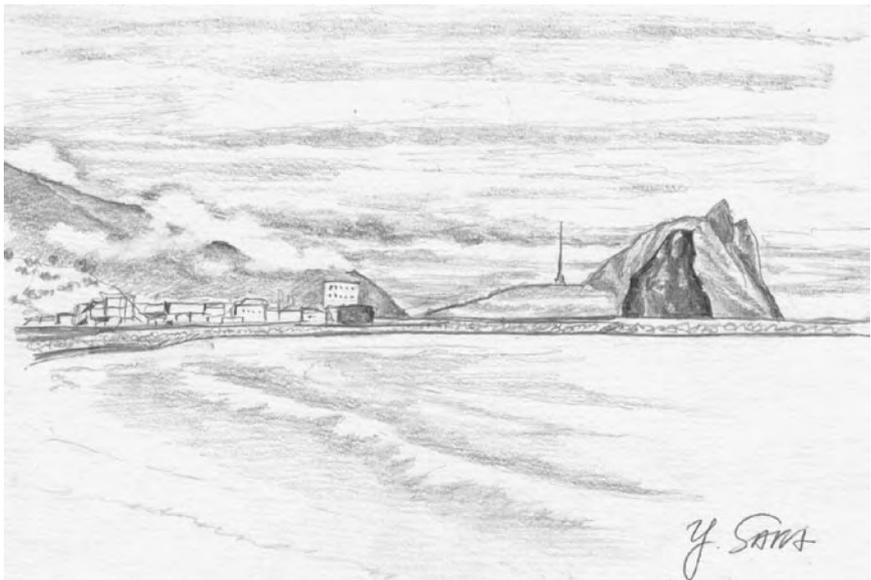
同窓会とは、本来、卒業生のそのような活躍ぶりを把握し、会員に近況・動向などを伝え、情報交換を取り持つのが主務であろうと考えます。しかし、会の健在ぶりを如実に示すのが総会であることも確かです。これは巻頭言ですから、上のような快い話題に終始するべきかもしれませんが、あえて憂慮すべき現状を述べることにします。

「雑用が増えます」と言い放ったのは不遜極まりないことですが、「雑用が増える」ことは事実です。会報や名簿に名を連ねている各種役職のなかで、歴代会長には申し訳ありませんが、最も何もしていないのが、会長です。会長になったからには頑張ると大見得を切った舌の根も乾かないうちに申し上げにくいことですが、会報・名簿の発行と発送、総会の準備や後始末、これらの実務を本来業務とは別に精力的に担当してい

ただいているのは、かつては山浦さん、現在は米持さんをはじめ事務職員と助手の諸君です。なにも総会とそれに続く懇親会だけが同窓会の活動ではありませんが、同窓会の意義を会員が体感できる場であることは疑いありません。その総会・懇親会への出席者数が頭打ちないし減少の一途をたどっています。初めて出席したという会員は毎回数えるほどです。この傾向は代が進むにつれて顕著となっています。

通信手段が革命的に進歩し、地球の裏側とも瞬時に情報がやりとりできる世の中です。IT社会にあつて便利になっただけ仕事が楽になったわけではありません。むしろ、進歩に「尻を叩かれ、せき立てられている」ような余裕のない日々を余儀なくされています。そんな時代に同窓会など古色蒼然としたものと映る人も多いでしょう。しかし、だからこそ年に1回の総会ぐらいには顔を出して、自分の世界とは異なる世界で活躍している先輩・同輩・後輩と談を交えるのも大いに意義があるものと信じます。たまには古巣に顔を出し、時は違えても同じ巣で青春の一時を送ったという事実を共有する仲間と交わることで、さらに大なる展望を開いていただきたいと衷心から願う次第です。

会員諸賢への檄文をつづるつもりが、哀願調となってしまいました。改めて諸兄諸姉のご活躍を祈りあげます。



北海道巡検・様似にて

教室だより

地球科学専修主任 高木 秀雄

昨年の教室便りでは、主任の最後として、6年間の主任としての感想まで触れましたが、2転3転して、私が教室主任を延長することになりました。今年に入ってからの教室としての最も大きな出来事は、40年にわたり専修および教育学部の発展に多大な貢献をされた堤 貞夫 教授の定年退職と、その後任として Timothy J. Fagan 博士の客員助教授就任でしょう。昨年の稲門地学会報で堤 教授の退職に関する特集がありましたので、今回は Fagan 先生について、少し紹介しましょう。ご本人の経歴や専門については、自己紹介に譲ります。教室では、地球科学の手法としてますます重要となっている同位体地球化学に分野を絞って、スミソニアン研究所でポスドクとして先進的研究をされていた Fagan 先生に白羽の矢が向けられました。Fagan 先生は、手法は同位体を使用されていますが、その目的とするところは、惑星の起源であり、隕石を使用して研究されている方で、岩石学にも通じておられます。ところで、南極のやまと山脈には氷河の移動によって掃き溜めになった隕石集積帯があり、それを収集した日本は世界最大の隕石保有国でもあります。

Fagan 先生が日本で研究を展開されることについても、メリットは少なくありません。学生にとっては、英語を使わざるを得ない状況に置く機会を設けることにより、英語力の増強にも、気さくな Fagan 先生は大いに貢献していただけるものと思います。

前回の稲門地学会報では、2007 年度から生物学専修が先進理工学部の新設される「生命医科学科」に移籍する予定と書きましたが、その移転がうまくいかなくなりました。つまり、新たな理学科に再編するために私たちが創りあげた青写真も、すべて幻になりました。そのような中で、数学専修が学科として独立すること、新理学科は生物学専修と地球科学専修で構成されること、地球科学専修に、実質的に大師堂教授が加わって、8 名体制で教育・研究を展開すること、などがほぼ決まりました。具体的な実行委員会はこれから立ち上がって議論がされますが、上記のことについてはもう覆ることはないと思います。つまり、2006 年度からは、地球科学専修に宇宙・惑星分野が加わることとなります。

若手では、曹奎煥 (Jo Kyu Hwan) 助手が 3 年の任期を終え、現在石油資源開発 (株) の地球科学研究所に勤めています。後任として坂研の太田 亨 助手が着任しました。太田助手は、修士まで九州大学に在籍し、博士課程から坂研究室で、九州の黒瀬川帯の堆積学的研究をされています。

昨年から今年にかけて、大学院 (資源) も含めて教員の病気が重なりました。いまま忙殺されそうな教員も少なくありませんが、今後は体調に留意し、健康第一の専修にしたいと思っています。景気が上昇傾向とはいえ、まだまだ厳しい状況が続いています。最近の稲門地学会総会では、卒業生の方の転職の話も頻繁に耳にしますが、健康第一でご活躍をお祈りしています。

堤 貞夫 先生のご退職に際し (教室便り追記)

地球科学専修主任 高木秀雄

私が早稲田大学に助手として着任したのは 1982 年、ちょうど早稲田大学 100 周年の時でした。助手としての 3 年間、私はそれまで堤研究室でもあった標本室の一角にスペースをいただき、もともと子供の頃から鉱物採集に興味があった私は、ときどき堤先生が集められた見事な標本を眺めながら自己満足しつつ過ごしました。そのときから堤先生は教務主任をなさっており、引き続き学部長、教務担当常任理事、と学部・大学の要職につかれ、その激務から解放されたのもつかの間、早稲田中・高校の校長として、活躍されました。また、バスケットボール部の部長としても活躍され、幅広い人脈を築いてこられました。堤先生をひとことで表せば、「親分肌」だと思います。その堤親分を慕って卒業生・在学生在が集まっていた有名なバラの会は残念ながら継続されていないようですが、実は私が最も心残りなのは、まだそのすばらしいバラを拝見していないことです。今年こそはぜひと思っていましたが、ご病気になられ、かないませんでした。いまはお元気になられましたので、来年にはお伺いしたいと思っています。地球科学専修の歴史をよくご存知の先生が抜けることは、今後の歴史を築くべき私たちにとっても、とても不安でありまた残念でなりません。先生が集められてきた貴重な鉱物標本をきちんとした形で整理、陳列できるように、できる限りのことをしたいと存じます。また、ご退職後も、125 周年の理工系再編について稲門地学会で先生に良い報告ができるように、ベストを尽くす所存です。最後になりますが、心より先生のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

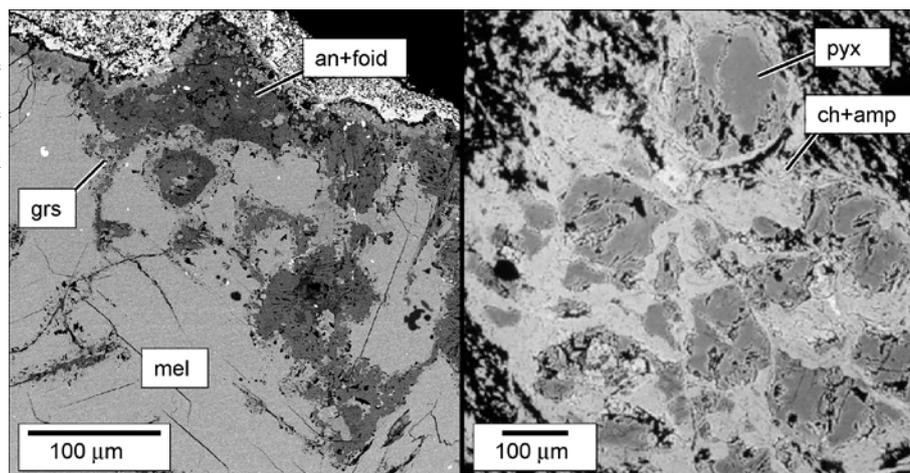
新任の挨拶

Timothy J. Fagan

I am delighted with the opportunity to work in the Earth Sciences Department at Waseda University. My academic interests focus on mineral reactions in rocks from terrestrial metamorphic belts, the Moon and asteroids. I combine mineral textures with elemental and isotopic compositions to evaluate the conditions of metamorphism and the flows of elements into and out of rocks during alteration. This research allows us to infer temperatures, pressures and geochemical processes involved in the origin of the Earth's crust, the Moon, asteroids and the solar nebula (the cloud of dust and gas surrounding the early Sun).

Most of my projects begin with a look at rock textures. The back-scattered electron pictures below show reaction textures in a terrestrial volcanic rock and in a rock that crystallized from a melt droplet in the solar nebula. Can you tell which is which? The image on the left shows melilite (mel) that has altered to grossular (grs) and anorthite + feldspathoid (an+foid). The image on the right shows pyroxene (pyx) altered to chlorite + amphibole (ch+amp). In spite of the differences in age and geologic setting, alteration of the two rocks probably occurred under similar physical conditions in the presence of water. The rock on the left is from the carbonaceous chondrite Allende, and the rock on the right is from a Jurassic metavolcanic belt in California, USA.

In addition to work, I hope to enjoy other aspects of life in Japan: onsen, hiking, and especially the food! 食事をしませんか？



研究室便り

坂研究室

渡邊 貴央 (第 39 期)

今年度の坂研究室は P D 1 名, 修士課程 3 名, 学部生 5 名の計 9 名です。今年度の研究テーマは、「三重県度会郡南島町の四万十帯」, 「関東山地, 山中地溝帯 “南列の地層”」および「名栗断層」の三本立てです。それぞれの大きいテーマのなかで地質調査, 構造解析, 堆積構造, 緑色岩岩石学, 放散虫年代, イライト結晶度などの細かいテーマに分かれて研究しています。

坂先生は, 今年 1 月に手術を受け, その後の治療のため前期後半には学校にいらっしやれない日が多くありました。先生不在がちという非常事態の中, P D の加藤さん, 助手の太田さんの指導の下, 修論生を筆頭

に一致団結して研究活動を行っています。修論生は地質学会発表を控え今まで以上に気合が入っており、卒論生もフィールドやサンプル処理など修論生に負けないように頑張っております。先生は後期には復帰されるとのことでその日を待ち望んでいます。

OB/OGの皆様には、近くにいらっしゃる機会がありましたら研究室にお寄りいただいて、アドバイスや卒論の手の抜き方(?)等をご指導していただければと思っております。また、研究室は意外と(?)アットホームな雰囲気なので、1~3年生も気軽に研究室に立ち寄ってください。

平野研究室

田原溜衣 (第39期)

今年の平野研究室は、PD1名、研究生1名、博士課程5名、修士課程15名、学部生4名の計26名であり、今年も大人数の研究室となりました。研究分野も広範囲にわたり、炭素同位体比、微化石では放散虫・有孔虫・渦鞭毛藻・花粉、軟体動物化石ではアンモナイト・イノセラムス・二枚貝、生痕化石、また最近では脊椎動物の分野まで幅広く研究をしています。さらに脊椎動物を研究したいとイギリス・中国留学をする先輩方がおり、ワールドワイドに活動しています。

フィールドでは北海道を中心として道内でも北から南と点在し、さらに日本各地にも広がり、海外では中国でのフィールドにも力をいれています。

今年の中国での巡検では多くのアクシデントがあったようですが、先生がご無事で帰国されたのは先生のお酒好きが食中毒を消毒したのではないかと密かに思っています。今年研究室にはいってから、私自身いままでも以上に日本酒とワインの波に“飲まれている”気がします。研究室に入る前は、お酒が飲めないと苦しいかとも先輩に言われましたが、今のところなんとか研究室の片隅においてもらっています。

このように先生のお酒好きは衰えることなく、今年の10月15日には、平野先生の還暦祝いを迎えます。これからも研究室のメンバーにご助言をいただきたく、先生のこれからのますますのご活躍を祈りつつ、研究室メンバー一同日々研究をしていきたいと思っています。

円城寺研究室

徳久 佑介 (第39期)

2005年度の円城寺(鉱床学)研究室がどれだけエンジョイな研究室か卒論生にインタビューを取ってきました(徳久)。

田中「こんなステキな研究室、見たことない！僕は、僕はこの研究室でよかったー！」伊藤「多くの素晴らしい仲間と、一人の素晴らしい先生がいます。やる気があれば多くのことを得られる素晴らしい研究室で、とにかく素晴らしいです。」渡辺「人気があるから人数の割に机が足りません。シューカツできる。ありがとう。キレイな鉱物たちがいつでも見れる。紫水晶は絶品です。自分で自分の道が拓ける研究室。ようこそ¥研へ。」島崎「個性豊かなメンツがそれぞれの道を進んでいるが、円城寺先生の下でまとまっている？」米林「地球科学の研究室では一番早稲田らしさのある研究室。学生も先生も一番アツイ人たちばかりです。研究テーマは奥秩父大滝村中津川流域の漂砂金の分布と科学的性質。」松永「非常に自由な研究室で自分の思ったことができる素晴らしい場所だと思います。砂金の研究が上手く進むことを願います。」長谷川「秩父鉱山地域における不透明球形物の研究をしています。」野村「神津島の黒曜岩・流紋岩の研究をしています。薄片作りに苦戦中です。」早川「水晶に魅せられました。」渡部「京都の鞍馬石を研究中。研究室は暑苦しい状態が

続いております。」、高橋「神津島の黒曜岩を研究しています。楽しい人たちがたくさんいます。」、梶田「庭石で有名な京都鞍馬石を研究中。薄片作りの毎日です。みんな元気に頑張っています。」稲葉「研究テーマに若干の自由度を与えてくださった先生に感謝しています。」

院生の皆様も研究や人生をエンジョイされており、円城寺教授も大学の仕事や研究等で多忙極まりなく働かれています、まだまだ元気にエンジョイしておられます。

以上のように鉱床学研究室は皆、エンジョイ中ですが、これを読んでいる皆様も、人生エンジョイしていますか？

小笠原研究室

城谷和代 (第 39 期)

小笠原研究室は M2・4 人, M1・2 人, B・2 人の計 8 人です。他研と比べるとやや小規模な研究室ですが、行っている研究内容はミンミンゼミの鳴き声よりもさらに大きいです (執筆現在, 夏)。セミはあの小さな体で、空洞になっているお腹を振動させて、あんなにも大きな音を出すそうです。ちょっと感動です。つまり、“小笠原研も小規模ながらも大きなことをやっている” ということです。

それでは、具体的に研究内容を紹介します。

- ・ Kokchetav 変成帯 (カザフスタン) 産の超高压変成岩類の岩石学的研究
例) 炭酸塩岩に存するダイヤモンドを対象とした炭素循環の解明, 地下深部での流体の役割についてなど
- ・ Wyoming Province, U.S.A. に産する太古代基盤岩の岩石学的研究
例) 太古代の火成作用と変成作用の解明, 太古代の大陸地殻形成の解明 など

以上のように世界各地の岩石を対象として、その成因を解明し、地球史においてどのような位置づけか、を考察しています。ちょっと……いや、とても感激です。そんな魅力いっぱいの研究に囲まれた研究室を現在 B 4 である私の目からちょっと垣間見てみましょう。

研究室の入り口に貼られた先輩方の学会発表ポスター、その光沢紙のツルツルの如く、研究室の床はいつもツルツルです、というか整理整頓が行き届いています。学生部屋の隣の部屋は更にキレイで、その部屋には研究の要となる装置 (偏光顕微鏡, ラマン分光器, FTIR) が置かれています。主にそこで薄片観察や鉱物の同定をします。私自身、先輩方の研究の姿勢に刺激を受けることもよくある様に、皆熱心に研究を行っています。

高木研究室

荒井優祐 (第 39 期)

今年度の高木研究室には、博士課程 4 名, 修士課程 7 名, 学部生 5 名の計 16 名が在籍しており、先生からは勿論のこと、助手・OB・OG の方々からも御指導・助言を賜り、各々のテーマについて日々研究を進めています。本研究室では、構造地質学・構造岩石学・テクトニクスを主体とした研究を扱っており、それぞれの学生が日本各地あるいは海外で野外地質調査を行っています。テーマとしては、日本列島の主要断層の構造発達史・岩石中のマイクロクラックを用いた応力場解析・内陸性地震の震源域における変形過程の解析などが挙げられます。それらのテーマに基づき、今年の 9 月に開かれる日本地質学会京都大会では、本研究室から 10 名の学生が発表 (ポスターセッション) を行う予定であり、現在はその準備に奮闘しています。

研究室のメンバーは誰もが個性豊かで、かつマイペースであり、先生の性格が研究室の雰囲気に影響していることは否定できません。それでも「大学に来るのが遅い」と時折先生からお叱りの言葉を受けており、この点は反省すべきであります。とは言え、研究室内の信頼関係は厚く、研究について学生同士互いに助言し合える新鮮な空気が常に存在しています。時にはサッカーなどの研究以外の話題で盛り上がることもあります。その傍ら、先輩方から厳しく指導して頂く場面もあり、緩急ある上下関係も保たれています。このように昨年同様、本研究室では「メリとハリ」が売りであります。

今年2月、先輩方の御好意で部屋の中央に大きなテーブルを2台用意して頂きました。当初は、私たち卒業生が研究室で作業できるように、とのことでありましたが、今では誰もが自由に使えるフリースペースとなっており、そこで地質図を広げて作業したり、研究について話し合ったり、弁当を食べたりなど、コミュニケーションの場としてこのテーブルは活躍しています。

しかしながら、今年度限りで博士・修士・学士で卒業を予定する学生が8名おり、来年度以降の研究室メンバーの人数は半減することになってしまいます。今の研究室の良い勢いを来年度にも繋げられるよう、努力していきたいと思っております。今後ご指導のほど、よろしくお願い致します。

小川研究室

岩田大輔（第39期）

私たちの研究室では、天然の鉱物の性質・形成メカニズムを応用して、機能性物質を創り出すことを主目的にし、研究を進めています。天然には様々な温度・圧力・雰囲気条件がありますが、私たちは粘土鉱物や生体鉱物など比較的温和な条件で形成するものに興味を持っています。鉱物を物質としてとらえ、従来知られていなかった物理化学的性質を解明することを一つの目的とし、また、有機化合物との相互作用を利用して鉱物の構造を活かしつつ、特徴的な分子集合構造を持つ無機有機ナノ複合材料への展開も試みています。このような研究から得られた知見をもとに、自然の神秘に迫るとともに地球環境浄化や光機能性材料などに貢献できる材料の創製に取り組んでいきたいと考えています。

研究室内の雰囲気はとても明るく、春に行われるゼミ合宿ではソフトボールやテニスが行われ、学生を退けて小川先生が一番張り切ってしまうほどです。そして普段から週末には気軽に飲みに行くこともあります。しかし、「締めるところはしっかり締める！」これが私たちの研究室であり、平日には朝から夜遅くまでしっかり勉強をし、数多くの論文を読み、そこから世界でまだ誰も行っていない自分だけのオリジナリティを出し、日々研究に没頭しています。このように柔らかくも固い雰囲気を作り出しているのが元気で若く才識のある小川先生なのであります。



現在、研究室では早稲田大学教育学部「地球科学」専修および早稲田大学大学院理工学研究科「環境資源及材料理工学」専攻の学生24人が在籍しており研究に勤しんでいます。

OB・OG 便り

五十路を前にして徒然三題—近況報告として

安藤寿男 (第 12 期)

水戸にある茨城大学理学部に来てから 13 年が経つ。その間に、私の所属学科は、地球科学科から地球生命環境科学科 (平成 7 (1995) 年) に、そして本年の平成 17 (2005) 年 4 月から理学科地球環境科学コースに変わった。昭和 50 年代前半の国立大理学部における一連の地球科学科創設期の最後にできた地球科学科が最初になくなり、日本で初めての地球生命環境科学科 (ほかに数理科学科と自然機能科学科との 3 学科体制) となったが、10 年後にはもとの 5 学科 (数物化生地) + 1 の 6 コース (数理・情報数理, 物理, 化学, 生物科学, 地球環境科学, 学際理学コース) へと再編されることになった。10 年間かけた“大きな実験”は不評で、結局振り出しに戻ったわけだが、非常に多くを学んだ 10 年間だった。学科運営や再編, カリキュラム構築, インフラ整備など多くの諸事に携わり, 教育研究以外に大学教員が抱える仕事がこれほどまでに多岐にわたるのかを体で覚えた。

2~3 年に 1 度ほど中学や高校の同窓会やクラス会の案内が名古屋から送られてくるようになった。大学を卒業して 25 年以上もたってしまうと、同窓会の役割を評価できる年齢になったのかと感じてしまう。子どもたちの教育のためにもと思い、4, 5 年前, クラス会に参加した折り, 実家の屋根裏部屋の片隅に放置されたダンボール箱から小中学校時代の成績簿などの入った袋を持ち帰った。その中には、小学校 6 年の時にクラスの皆で書いた「自分の将来の夢」がつぶられた一枚の半紙があった。「地球科学者になりたい」という一節は時を越えて、改めて自分がたどってきた道やその原点を再発見させてくれるようであった。

校友会の終身会費を父親が納めてくれたおかげで、早稲田学報が毎月送られてくるので、母校の発展の様子は垣間見ることができる。毎年秋になると稲門地学会報も送られてくる。助手の方々が交代で編集にあたってくれるおかげで、教室の様子や卒業生の活躍が伝わってくる。国立大学も一昨年から法人化され、私立大学と同じ土俵で少子化時代を乗り越えるべく競争社会に入った。茨城大理学部でも同窓会や卒業生のネットワークが見直され重視されつつある。稲門地学会という卒業生ネットワークを一つのモデルケースと位置付けて他と比較してしまう習性はなかなか抜けるものではないが、地方国立大において学生教職員に共通する希薄な同窓意識と最近の学生世代が縦の関係を築けない傾向をどう克服するかが、茨城大学発展の鍵の一つではないかと思えるようになった。

場所は変れど、仰ぐは同じき、理想の光

薬師大五郎 (第 29 期)

今年の 4 月に、横浜にある桐蔭学園に理科の教員として就職しました。桐蔭学園は野球やサッカー、柔道などスポーツの全国大会常連校として認識されている方も多いと思いますが、受験でも指折りの進学校です。東大の合格者数では毎年、トップテンに入ります。私立ですので特徴があるのは当たり前ですが、いくつも驚かされることがあります。まずは生徒数です。幼稚園から大学 (桐蔭横浜大学) まであるのですが、高校だけで 1 学年 1500 人ぐらい在籍しています。当然、全員の顔を覚えることはできません。施設も目を見張るものがあります。学校の中にホールがあってオーケストラや演劇などがしばしば上演されています。また横浜地方裁判所の陪審法廷を移築したホールもあります。

このような規模ですので、当然教員数も多く、なんと地学の教員だけで 4 人もいます。たぶん日本で一番

地学の教員が多い高校だと思われます。桐蔭学園では地学は理系の科目としてではなく、文系の科目として設置されています。というのは、国公立を目指す文系の生徒にとって地学がセンター試験で最も点の取りやすい科目だからです。こういった合理性も桐蔭学園の特徴です。桐蔭学園における地学は本来の姿ではないかも知れませんが、少しでも地球科学の面白さが伝わるような授業を心がけて行きたいと思っています。

私は鞠子研究室の最後の卒業生で、かつ、円城寺研究室の最初の学生です。今年の3月ようやく長い13年の早稲田生活を終えることができました。長い早稲田時代に学んだことを生かして、早稲田から桐蔭へと場所は変わりましたが、地学への思いに変わりなくこれからも精進したいと思っています。

気候からみた釧路・札幌・・・

島村 哲也 (第32期)

25年間住み慣れた埼玉を離れ、北海道に赴任してから早いもので5年目となりました。北海道巡検の時には、よもやこの地に住むことになろうとは思いませんでしたが、今ではこちらの気候にすっかり体が慣れてしまったようです。ここでは、これまでの赴任地を平年値(1971年～2000年の平均値)を使って振り返ってみたいと思います。

はじめの赴任地釧路は、霧の町。年間の霧日数は107.5日(東京5.1日)で、特に夏は毎日のように霧に包まれます。沖合の寒流(親潮)の影響で南風が吹くと気温が下がり、年平均気温は5.9℃(東京15.9℃)、真夏日(最高気温30℃以上の日)は1910年の観測開始以来4回しかありません。冬(12～2月)の平均気温は-4.4℃(東京6.7℃)、小学校の校庭にはスケートリンクが作られます。赴任した年には日本一遅い桜の開花も見ることができました(2001年の桜の開花日、釧路5/18、東京3/23)。釧路での2年間は、クーラーや扇風機といったものは不要でしたが、煙突ストーブと除湿機は必需品でした。

次の勤務地札幌は、雪の町。対馬暖流を渡る北西の季節風によって年間の降雪日数は124.7日(東京9.3日)、降雪量は496cm(東京13cm)にもなります。これほど雪が多いのに187万人もの人口を有する都市は、世界的にも類を見ないようです。冬にほぼ毎日降る雪は除雪が大変ですが、近郊のスキー場は雪質も良く、雪まつりでも有効に利用されています。夏はすっかり暑くなり、日本海では海水浴、大通りではビアガーデンが賑わいをみせます。春には雪融けとともに一斉に様々な花が咲き、札幌ではタンポポが4/30、桜と梅は同日の5/5が開花の平年値です。しかも杉の花粉は飛びません!

北海道に赴任して、実際に生活しないと分からないことをたくさん体験しましたが、今後も、その土地ならではの生活を楽しめればよいと思う今日この頃です。

最後に、坂先生をはじめ後輩の皆さまには私がやり残した調査を形あるものにまとめて頂き、大変お手数をお掛けしました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

専門部会報告

理科教育部会報告

木村 純 (第2期)

平成16年度理科教育部会(12月18日)は下記のように行いました。

会場: 早稲田実業学校(国分寺市)地学実験室

内容: 講演 アイスランド報告 [田島 丈年氏(27期:早稲田実業学校)] 田島氏は8月に地質見学をメインにしたアイスランド旅行をされました。興味深いお話をうかがうことが出来ました。

紹介 GPSシステム(ポケットナビゲーター)の利用例 [2期:木村 純]

出席者: 高木 秀雄先生(早稲田大学), 荒井 優佑(36期 学生会員), 木村 純(2期:早稲田実業学校), 田島 丈年(27期:早稲田実業学校), 薬師 大五郎(29期:早高等学院)

本年度教育部会の開催は現在未定です。決定しましたら、現会員の方々にはメーリングリスト、郵送等でご連絡いたします。なお本件に関わらずお問い合わせ等がありましたら、木村(j-kimura@wasedajg.ed.jp)までご連絡ください。なお理科教育部会メーリングリストについては宮下 敦(15期:成蹊高校)までお問い合わせください

鉱物専門部会報告

林 政彦 (第12期)

今年も恒例の鉱物研究会を早稲田大学理工学部62号館W棟1階大会議室で平成17年7月2日(土)に開催しました。今回の国立科学博物館の松原聰氏による「新産鉱物」の話は、昨年から1年間に日本で記載された新産鉱物はなく、10種類の新産鉱物が発見された、という内容でした。また、田辺克幸(12期)氏が岩手県釜石鉱山で勤務されていた時に収集されたフォンセン石(Vonsenite)を参加者全員に配りました。このVonseniteは、斜方晶系・ $\text{Fe}_2+2\text{Fe}_3+[\text{O}_2]\text{BO}_3$, 黒色金属光沢・柱状をなし産します。硼酸塩・ルドイヒ石系に属し、石灰岩起源のスカルン鉱床中に磁鉄鉱・磁硫鉄鉱・閃亜鉛鉱・灰鉄輝石などと共存します。この研究会は、山崎淳司(15期)氏と共に編集・発行している鉱物情報(<http://www6.plala.or.jp/mineral/>)が主催ですが、鉱物専門部会の方は自由に参加ができます。この専門部会に関心のある方は、林(mhayashi@aoni.waseda.jp)までお知らせください。

資源専門部会報告

古野正憲 (第19期)

資源専門部会の方は、2005年1月14日(金)の18:00から「葉隠れ」で懇親会をおこなっただけです。当日は、鞠子名誉教授をはじめ、資源・エネルギー・建設関連業界及び業界とは無関係の約20名が集まりました。来年も、例年通り、同時期に懇親会を開催する予定です。参加希望の方は、下記の古野宛までご連絡願います。

連絡先: 日鉄鉱業株式会社資源開発部資源開発課 古野正憲 E-mail: furuno@nittetsukou.co.jp

庶務からのお知らせ

来る12月17日(金)16時より高田牧舎にて2005年度総会を開催いたします。詳しくは総会案内をご覧の上、同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

会計報告 (2003 年度～ 2005 年度 9 月)

加藤 進 (第 15 期)

2003 (平成 15) 年度 稲門地学会 会計報告 (9 月分以降も含む)

収入		支出		
前年度繰越金	¥2,402,403	03 年度卒業生お祝い金	¥30,000	
会費 (卒業时会費)	¥20,000	04 年度入学生お祝い金	¥20,000	
会費 (20 年会費: 16 期まで)	¥180,000	会費振込み手数料	¥1,400	
利子	¥22	会報印刷発送費 (業者)	¥286,215	
総会残金	¥26,670	印刷・用紙費	¥53,442	
		会員データベース修正費	¥15,000	
		慶弔費	¥16,170	支出合計
		雑費	¥8,118	¥430,345
		次年度繰越金	¥2,198,750	
	¥2,629,095		¥2,629,095	

2004 (平成 16) 年度 稲門地学会 会計報告

収入		支出		
前年度繰越金	¥2,198,750	04 年度卒業生お祝い金	¥30,000	
会費 (卒業时会費)	¥50,000	05 年度入学生お祝い金	¥20,000	
会費 (20 年会費: 17 期まで)	¥80,000	会費振込み手数料	¥900	
利子	¥6	会報印刷発送費 (業者)	¥315,580	
総会残金	¥51,010	印刷・用紙費	¥85,715	
		通信費 (葉書・切手代)	¥53,350	
		会員データベース修正費	¥15,000	支出合計
		雑費	¥8,118	¥528,663
		次年度繰越金	¥1,851,103	
	¥2,379,766		¥2,379,766	

2005 (平成 17) 年度 稲門地学会 会計報告

収入		支出		
前年度繰越金	¥1,851,103	05 年度卒業生お祝い金	¥30,000	
会費 (卒業时会費)	¥10,000	会費降込み手数料	¥130	
会費 (20 年会費: 18 期まで)	¥10,000	堤先生最終講義案内等	¥88,449	
利子	¥8	堤先生を囲む会補填	¥123,570	
				支出合計
				¥212,149
		次年度繰越金		
	¥1,871,111		¥1,871,111	

2004年・2005年度 稲門地学会役員・幹事

役員

- [会長] 坂 幸恭 (教職員)
 [副会長] 原 雄 (2期), 林 政彦 (12期)
 [庶務] 米持 賢治 (教職員・15期)
 [会計] 加藤 進 (15期), 戸高 法文 (12期)
 [監査] 平野 弘道 (教職員), 高野 良一 (1期), 筑紫 恒男 (2期)

幹事

- [教職員] 坂 幸恭, 米持 賢治
 [1期] 篠田 晋治, 高田 徹夫 [2期] 筑紫 恒男, 古川 雅彦
 [3期] 川島 眞一 [4期] 石田 吉明, 篠崎 貞
 [5期] 伊藤 和男, 酒井 健, 福田 正光 [6期] 市毛 芳克, 三宅 克行
 [7期] 中泉 徹 [8期] 山崎 次郎, 若林 直樹
 [9期] 稲田 敬, 池田 則生, 村野 隆 [10期] 大橋 信介, 塩澤勝太郎
 [11期] 品田 進司 [12期] 安藤 寿男, 戸高 法文, 林 政彦
 [13期] 泉谷 泰志, 佐野 浩, 永井 保弘 [14期] 野々口 稔, 村松 春彦
 [15期] 加藤 進, 小池 豊, 宮下 敦 [16期] 磯上 篤生, 宇田川義夫
 [17期] 市川 昌則, 長谷部直人 [18期] 田中 義洋
 [19期] 金澤 義人, 古野 正憲 [20期] 嘉戸 章江, 瀬谷 正巳, 西堀 一彦
 [21期] 風間 武彦, 加藤 潔, 森岡 右伍 [22期] 大森 聡一, 塚田 裕子
 [23期] 堀田 照久, 安田有希子 [24期] 安藤 生大, 小林 健太
 [25期] 荒木 康彦, 松田 達生, 三浦 玲子 [26期] 梅田 朝美, 山上 順民, 頼 雨新
 [27期] 石井 明仁, 田島 丈年, 三輪真一郎 [28期] 中村 一夫, 野口 眞弓, 山本 浩万
 [29期] 島田 耕史, 高橋 一晴 [30期] 小林 靖広, 曹 奎煥
 [31期] 浅井 志保, 安藤 康行, 太田 雅仁 [32期] 水野 崇, 梶川 直
 [33期] 馬場 恵里, 細見 幸信 [34期] 向 充美, 吉岡 伸浩
 [35期] 今村 恭子, 井上 恭豪 [36期] 大泉 満彦, 田中 智史
 [37期] 加納 大道, 坂 秀憲

運営委員

- [総務] 篠田 晋治 (1期), 木村 純 (2期), 原 雄 (3期), 川島 眞一 (3期)
 [総会] 井岡 大和 (3期), 塩澤勝太郎 (10期), 林 政彦 (12期), 田島 丈年 (27期)
 [名簿] 松村 春彦 (14期), 米持 賢治 (教職員・15期)
 [会報] 宮下 敦 (15期), 太田 亨 (31期)

稲門地学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育学部地球科学教室内

TEL : 03-3208-8473 / FAX : 03-3207-4950

http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index_j.html

e-mail : earth@edu.waseda.ac.jp

編集代表：太田 亨（教職員・31期）

編 集：宮下 敦（15期）

題 字：大杉 徹（名誉教授）